

2011/11/24
第 31 号
(23 年 11 月号)

し の の め



長野県総合教育センター通信

〒 399-0711 長野県塩尻市大字片丘字南唐沢 6342-4
TEL (0263) 53-8802 FAX (0263) 51-1290 E-mail kikaku@edu-ctr.pref.nagano.jp

全教連金沢大会に参加して

次長兼総務部長 小口 一男

11 月 10 日と 11 日に金沢市において開催された、「全国教育研究所連盟第 20 期共同研究第 2 回全国研究集会」に参加してまいりました。この第 20 期研究集会は、「実践的な指導力の向上を図るこれからの教員研修の在り方」を研究主題として、平成 22 年度から平成 24 年度までの三カ年計画で研究を深めようとするもので、その 2 回目が金沢市の石川県教育センターを会場として開かれたものであります。

詳しい内容は、いずれ Web で公開されるでしょうが、私が参加して心に残った点について述べてみたいと思います。

最近の教員をめぐる一つの背景として、大量退職と大量採用による教員の世代交代とベテラン教員からミドルリーダーや若手教員への知識、技術の伝承の機会の減少による教員全体の指導力の低下が懸念されています。同僚性の欠如という言葉で語られることもあります。長野県においても今年くらいから、退職教員と採用者が増加していると思われます。

これらの状況を打破するためには、それぞれの学校において主体的に、個々又は集団での研修の仕組みを構築することが不可欠であろうと思います。そして、その研修を総合教育センターが支援する方策を考えることが重要であるとの思いを抱きながら金沢から帰ってまいりました。



秋の防災訓練(11月4日)

広丘消防署の指導により、放水訓練、救急搬送法訓練(備付の担架、毛布と竹の棒で応急的に作った担架)、止血法訓練などを行いました。



センター北側の紅葉林



研修講座探訪

10月までに行われた希望研修講座を紹介します

【ことばの教室における指導 ～コミュニケーションが苦手な子ども達の指導～】

10月17日（月）実施（受講者36名）

ことばの教室の先駆者であり第一人者である元横浜国立大学講師の信國久子先生を講師としてお招きし、コミュニケーションを高めることばの指導について学びました。受講者の多くはことばの教室の先生でしたが、小中学校の特別支援学級や特別支援学校の先生も受講し、ことばの指導におけるニーズの高さがうかがえました。



<講座内容>

(1) 講義「コミュニケーションが苦手な子ども達の指導 ～グループ指導のビデオから～」

構音障害、吃音、難聴など「ことば」や「きこえ」に課題のある子ども達のグループ指導のビデオ視聴と講義を通して、コミュニケーションの力をどのようにして高めていくのか具体的に学びました。



(2) 演習「ことば遊びの演習 ～トランプを使って～」

ことばの教室の授業を想定して実践的な演習を行いました。ビニール袋、トランプ、カレンダーなどを使い、様々な個別学習とグループ学習の演習を通して、具体的な指導方法や指導上の留意点を学びました。



トランプを使って



カレンダーを使って

受講者の感想より

- 一切編集のない映像で、生の授業の流れや様子がわかりました。五感を使い主体的に学ぶ子ども達の姿から、工夫や意識次第で授業は変わることを学びました。
- 自由な発想でことばを豊かにしていく方法やコミュニケーションが必然的に楽しくできる方法を学びました。今後の実践の中で少しずつ挑戦していきたいです。
- 社会の中の一の人間として必要な力やソーシャルスキルを身につけるといった視点が大変勉強になりました。わくわくするような教材の準備や提示方法の工夫により、生活の中で使えることばを育てる授業づくりをしていきたいです。

研修講座探訪

【専門教育の充実と改善】

8月19日(金)実施 (受講者 21名)

専門高校の先生方を対象に、「専門教育の現状と課題」を認識し、「専門教育活性化に向けた取り組み」について共有を図り、「人材育成」のための教育内容について考えることを目的に講座を実施しました。

午前は、長野経済研究所 調査部長代理兼 上席研究員 中村雅展氏に「企業との連携による地域産業の担い手育成を目指して」と題して講義をして頂きました。県内の産業界の動向についてさまざまな視点から分析し、人材育成の重要性や必要性、企業と学校とが連携した人材育成の具体的な取り組みについて熱心に講義をして頂きました。



昼休みの後は、長野工業高等学校 校長 宮島範雄 先生から「産業教育に携わる教員に期待するもの」という内容で、ご自身の経験を交えて人材育成について熱く語っていただきました。また、課題解決のためにSWOT分析などマネジメントの手法についても具体的な例を交えて紹介して頂きました。

次に、農業科・工業科・商業科・家庭・福祉科における「課題研究の充実に向けた取り組み」について実践発表をして頂きました。農業では課題研究の成果が評価され、各種表彰等をされる充実した研究内容が、工業科からは高大連携の取り組みについて、商業科からは長野県金融広報委員会より「金融教育研究校」として指定され各種資格取得において大きな実績をあげたこと、家庭科の実践発表では地域を巻き込んだ課題研究の実践が報告されました。

この研修を通して、専門教育に関わる教員にとって、地域で必要とされている人材育成の重要性を再認識することができたのではないのでしょうか。

受講者のアンケートでは「自分の専門以外の教科が特に参考となりました。」、「各分野における課題を整理して連携をとることができれば面白いと感じました。」といった感想がありました。学科の枠を超えて連携を図ることにより、人材育成のための指導をより一層充実させることが期待できるのではないのでしょうか。

今からでも間に合う研修講座(12月～2月開講の講座) 11月22日現在

分野	講座番号	講座名	対象	日程	募集人数
教科等	3-1-07-04	中学校・高校音楽基礎Ⅱ	中高特	1/24	2
	3-1-08-04	小学校高学年 図画工作基礎B	小中特	1/12	3
	3-1-09-28	幼児とのふれ合いと家族	中高特	1/26	8
	3-1-10-02	中学校技術基礎(情報・電気)	中特	1/24	2
教育課題	3-2-10-21	カリキュラム・マネジメント	小中	12/2	26
産業教育	3-4-22-22	射出成形技術と金型	高(工)	1/19~20	2
	3-4-30-22	産業教育教材研究と指導法	職業学科	2/17	28

追加募集は10日前まで受け付けています。HPで確認して電子申請で申込みをお願いします。

—— 指定研修講座を振り返って ——

教職教育部が10、11月に実施した指定研修から3講座を振り返ります

◇高等学校初任者研修「生徒指導研修Ⅱ」

10月4日(火)に高等学校初任者研修「生徒指導研修Ⅱ」が行われました。特別支援教育課指導係腰原英徹指導主事「発達障害の理解と高校における特別支援教育」では、発達障害について詳しい説明をされ、支援についての留意点として、分かりやすい指示、スモールステップや評価の仕方等について理解を深めました。また、この支援は、すべての生徒にとっての支援にもなっていることを話されました。加えて、この支援は自立につながるものでなければならないことを話されました。

教学指導課心の支援室人権支援係平林明指導主事の講義・演習「長野県の人権教育の現状と課題」では、人権は様々な権利の集合体であり、たとえその一つが侵害されても人権が守られているとは言えないことから講義を始めました。その後、いくつかの演習をとおして、根拠のない判断や感情の働きが偏見につながり、それが具体的な行為・行動として発現したものが差別となることを体験し、理解しました。さらに、人権思想の歴史、長野県の人権課題、子どもの自殺予防及びネット・ケータイをめぐる問題等について話されました。

<受講者の感想から>

- ・ 特別支援教育で実践されている指導は普段の具体的な生徒支援の手立てとして、ユニバーサルデザインなど特別支援教育で実践されている指導は普段の授業にも同様に効果的であることを認識しました。またその際に、自立のための意識を忘れないようにしたいと思います。
- ・ 講義・演習を通じて、人権教育について、生徒にどのようにアプローチしていけばよいかのヒントを得ることができたと思う。また、生徒たちにとって人権の問題と携帯電話、インターネットがとても密接に関連しており、自分だけでなく、他人の人権を守ることを考え、指導をしなければならないと感じた。



人権教育の現状と課題における演習
「フォトランゲージ」で相手探し

◇5年経験者研修(小・特)(中・高)「共通必修研修Ⅱ」

10月7日(金)に小学校・特別支援学校、10月14日(金)に中学校・高等学校の教諭を対象に、5年経験者研修「共通必修研修Ⅱ」が行われました。午前中は、「学校教育における情報モラル教育」と題して、上田第三中学校の松島恒志教頭が、携帯電話等のメディアについての知識や技術を理解する(知恵を磨くこと)とともに、児童・生徒ひとりひとりに「あなたが大事」という心を磨くことの指導の必要性を講義された。引き続いて、小学校・特別支援学校の講座では、稲荷山養護学校の金子聡美教諭から「みんなで支援・チームで支援」と題して、チームで不登校防止に取り組んで実績をあげた事例発表がありました。中学校・高等学校の講座では、仁科台中学校の工藤弘教諭による「不登校生を減らすために」と題した、小・中学校の連携指導やアンケート調査などを利用した実践発表がありました。

午後は「人間関係づくりと教育相談的対応」と題して、文教大学情報学部の柳生和男教授が、現代社会におけるDVの増加や家族の破綻、地域の包容力の低下のなかで子どもたちは暮らしている状況を挙げながらも、不登校の生徒に寄り添い、専門家に任せる前にまず教師自らが行動をすることによって、生徒が良い方向へ向かうことが多いことを個別の事例等に基づいて話された。

<受講者の感想から>

- ・情報モラル教育という「フィルタリング」や「使用制限」など、まず技術的な面が思いつきますが、それだけでは子どもの安全は守れないので、こころの面からの指導も必要だと思いました。
- ・実践発表を聞いて、不登校対策について保護者との対応で悩むことが多いので、「学校に行きたい」「学校に行かせたい」と思えるような環境づくりを惜しまない姿勢を学びました。
- ・中一ギャップをアンケートで予測できることを知り、今まで不登校を減らす具体的な方法が明確でなく、担任に負担が多くいってしまうような状態でしたが、講師の示されたアンケートで生徒理解ができ、データを基に効果的な方法が示されたことは、希望の光になりました。
- ・スクールカウンセラーや不登校支援の先生にお願いをして安心してしまいがちですが、生徒をよく見て、しっかり会って、今後の行動を考える必要性を感じました。



文教大学 柳生教授の講義

◇教育課題別研修「学校評価と学校組織マネジメント」 * 10月6日(木)実施 (受講者22名)

現在、各学校では学校評価を取り入れての学校づくりが進められています。今回の講座では、各校で、実際に学校評価を進める中で生じた疑問や課題の解決の糸口を探ったり、より実効性のある評価システムに改善したりすることを目的に、講義で学校評価の基本を確認するとともに、演習の時間を多く取り入れ、より実践的に研修を行いました。校種別の少人数グループでの演習は、各学校から持ち寄った資料をもとに、活発に課題の抽出や情報交換が行われ、共通の課題の上に立った協議により充実した時間となりました。

また、演習の最後には、各グループの代表による発表を行い、全体で研修成果を共有することができました。



各班で課題整理と協議



全体発表で成果の共有

<講座の内容>

① 講義「これからの学校評価に求められていること」

講師 文部科学省初等中等教育局参事官(学校運営支援担当)付 参事官補佐 廣野 宏正

② 講義・演習「学校評価システムの改善」

講師 国立教育政策研究所 教育政策・評価研究部主任研究官 植田 みどり

<受講者の感想から>

- 学校だけで推進するのではなく、保護者や地域に理解者や支援者になってもらうためにも、学校の実状や方針を説明して理解を求めると共に、期待や要望を吸い上げてコミュニケーションを図り、学校運営を行っていく上で連携や協力ができる関わりができるとよいと感じた。
- 学校評価の基盤となる「共有化」について、それぞれの学校が抱えている様々な問題を出し合い、分類・整理したことで、「共有化」の大切さを、身をもって感じ取ることができた。それを後半の講義で理論的裏付けを教えていただいたことで、より理解が深まった。
- 班で結論に達した「情報の共有化」の大切さについて、「いかに『大事なことをシンプルに』伝えるか」といった、具体的な方策が得られたことで、今後の学校評価、学校づくりに活かしていける気がして大変有り難かった。

教育相談や学級活動に生かす 表現療法 “MS SM”

MS SM (Mutual Scribble Story Making) は「相互ぐるぐる描き物語統合法」と言い、非言語媒体を利用して子どもの内界を表出させる表現療法のひとつです。10月19日(水)に実施した生徒指導研修「不登校の子どもの心理と関わり方」講座において、講師である東京福祉大学の長坂正文教授から紹介があり演習も行いました。受講者アンケートには「是非学校でもやってみたい」といった感想が多くありました。実際、研修翌日にさっそく実践された方もいます。MS SMは、二人で15~30分程度の時間を使って活動します。遊び感覚で実施できるため子どもの抵抗感が少ない上、活動を通して二人の間に自然に交流が生まれるので、教室に入らず別室登校をしている子どもの面接や、登校できない子どもに対する家庭訪問における面接など、教育相談に活用することができます。



◆ 準備するもの：A4用紙、黒ボールペン、クーピー（クレヨン、色鉛筆）

実施方法（教育相談の場合）

- ① 教示：「“ぐるぐる描き”、“見つけ遊び”をやしましょう。」
- ② 教師が、黒ボールペンで用紙の縁に沿って四角の枠を描く。
- ③ 子どもに、用紙をいくつか（5~7つが適当）仕切ってもらおう。
- ④ 一番最後までとっておくスペース（物語を書くため）を子どもに決めてもらい、教師がそのスペースの隅に小さく丸（○）をつける。
- ⑤ 教師が、ひとつのスペースに適当に曲線を描き、それが何に見えるか子どもに質問する。
- ⑥ 子どもは、その曲線からイメージしたものになるように、描き足しをしてから、クーピーで彩色する。
- ⑦ 役割を交代して、子どもが曲線を描き、教師がイメージし描き足して彩色する。
- ⑧ これを、④で決めたひとつのスペースだけが残るまで続ける。
- ⑨ 子どもに、すべての「ぐるぐる描き」を使って（使う順番は自由）物語を作ってもらい、残ったスペースにそのストーリーを書き込んでもらう。（教師が書きとる方法もあり）
- ⑩ 完成したら、教師がストーリーを読みながら二人で鑑賞する。
 - ・ 物語やそれぞれの絵について感想を述べ合う。
 - ・ 活動をやってみてどうだったか感想を聞く。
 - ・ 教師は、感じ取ったことを子どもに伝える。



◆ 留意点：活動中に、例えば死を強く連想させる絵や彩色など表現に危険性を感じたならばすぐにやめたほうがよい場合があります。また、彩色（例えば真っ黒な場合）や出来上がった物語の内容により、職員で情報を共有し、しっかりとアフターケアをすることが大切です。

バウムやコラージュなどもそうですが、療法というより、表現されたものをしっかり解釈しなければならぬと思ってしまうかもしれませんが、長坂先生から「表現することに意味がある。それ自体が治療につながることもある。子どもが自分の内界をイメージとして表現すること、大人がそれに共感的につき合うことが大切である」と講義の中で教えていただきました。MS SMも複数回実施すれば、楽しい活動を通じた感情交流の繰り返しの中で、子どもが安心して自己表現できるようになり、関係も深まり、それが支援につながっていくのではないかと考えます。また、少しアレンジすれば学級活動にも生かすことができます。



まず、二人組を作り、ジャンケンで勝った人が最初の曲線を描く役、もう一人がストーリーを書き込む役になります。これを、役割を交代してもう一度行えば、二人とも物語を作ることができます。完成させた作品をグループあるいは全員で鑑賞し感想を発表する、教室に掲示して鑑賞するなどの活動がよい振り返りとなり、子どもたちの関係を再構築したり深化させたりすることができる場合もあります。ぜひご活用ください。